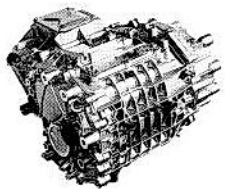


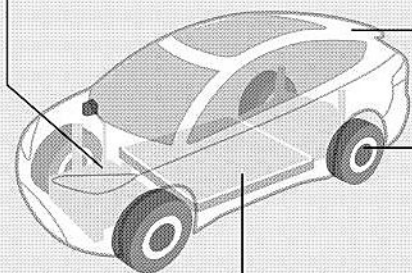
EVの波 技術に磨き

京都企業は先端技術を磨きEV市場を開拓する

ニデック



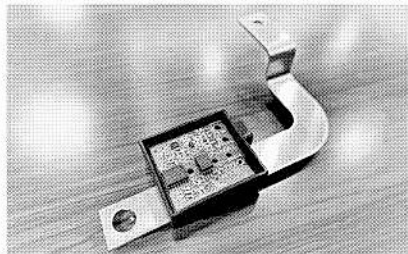
モーターとギア、インバーターを一体化したEV駆動装置「イーアクスル」の第2世代を拡販する



GSユアサ

EV向けのリチウムイオン電池の本格量産に乗り出す

サンコール



ローム



省エネルギー性能が高い炭化ケイ素（SiC）製パワー半導体を増産する

村田製作所



150億円を投じて、自動車の加速や揺れを検知する「慣性力センサー」を増産する

片岡製作所

京都市南区の本社と工場を拡張し、システムの需要増に対応していく

「電流センサー付きバスバー」など成長分野のEV部品開発を強化するため、京都府亀岡市の企業団地に約12億円を投じて新拠点を設ける

世界的な電気自動車（EV）シフトの波を捉えようと、京都の製造業が積極投資を始めている。世界のEVとプラグインハイブリッド車（PHEV）の販売台数は2022年に1000万台を超えた。京都の有力企業は電子部品など先端技術を磨き、新市場を開拓している。

ニデック（旧日本電産）はモーターとギア、インバーターを一体化したEV駆動装置「イーアクスル」で、利益率の高い第2世代を24年3月期から本格的に市場投入する。EVにとってイ

ーアクスルはエンジンに取って代わる「心臓部」ともいわれ、25年度までに累計3000億円を投じて生産拡大していく方針だ。23年10月には年間生産能力で100万台に対応する中国・浙江省の旗艦工場が

立ち上がる。早船一弥常務執行役員は「ニデックの強みは速さとコスト」と強調する。需要に先駆けて先行投資し、軽薄短小でモーターをつくる技術と合わせ、

まずは中国の顧客を中心に販売を広げる。村田製作所は27年ごろまでに石川県内やフィリッパインの工場に150億円を投じて、自動車の加速や揺れを検知する「慣性力センサー」を増産する。自動運転が普及する中、カメラや全地球測位システム（GPS）を補うセンサーとして活用が期待されている。12年に買収したフィンランド企業の技術で、従来は同国で製造していた。新たに石川県内の工場でも生産を始めて2極体制とすることで、安定供給を求める自動車業界の需要に応える。

ロームは従来のシリコン製に比べて省エネルギー性能が高い炭化ケイ素（SiC）製パワー半導体の生産体制を増強する。SiC製パワー半導体は省エネ性能の高さからEVの航続距離の延長につながるとして、欧州や中国の企業との長期供給契約が増えている。S

iC製を含むパワー半導体の設備投資は27年度までの7年間で5100億円を計画する。伊野和英最高財務責任者（CFO）は「自動車メーカーのEVシフトが前倒しになっている」と話す。

GSユアサはホンダと組んで、EV向けのリチウムイオン電池の本格量産に乗り出す。車載電池などの技術開発と国内工場の整備に、経済産業省からの支援も含めて計約4300億円を投じる。新工場は滋賀県内に建設する方針だ。村尾修社長は「車種にもよるが、台数にすると30万〜40万台分の生産規模になる」と説明する。

オムロンはEV関連の設備投資需要を追い風に、主力の制御機器事業が伸びている。辻永順太社長は「EV向け電池やモーターは設備投資需要が非常に旺盛だ」と話しており、EVを含む成長分野に営業人員をシフトして需要拡大に対応していく。

サンコールは「電流センサー付きバスバー」など成長分野のEV部品開発を強化するため、京都府亀岡市の企業団地に約12億円を投じて新拠点を設ける。リチウムイオン電池の検査システムを手掛ける片岡製作所（京都市）は京都市南区の本社と工場を拡張し、システムの需要増に対応する。